

## 西周と近代的諸学の体系的摂取

岩崎 允胤

### I. 西周の生涯

— 朱子学から徂徠学を経て西歐学問の摂取へ —

1. 朱子学（崎門派）から徂徠学、そして洋学へ
2. オランダ留学と、帰国後の啓蒙活動
3. 近代軍制の確立とイデオロギー

### II. 近代的諸学の体系的な摂取

— 『百学連環』について —

1. 西洋哲学にたいする関心
  2. 「開題門」その他の哲学断片
  3. 「百一新論」
  4. 『百学連環』
  5. 諸学の体系化の歴史的意義
    - (1) 当時の日本の諸条件
    - (2) 『百学連環』と『学問のすすめ』（福沢諭吉）との相違点
    - (3) 『百学連環』の意義  
— フランシス・ベーコンとの比較 —
- 付載 『百学連環』の総目次

キーワード：朱子学、徂徠学、百学連環、  
Encyclopedia、実証主義、フランシス・ベーコン、コント、フィセリング、津田眞道、森鷗外

### I. 西周の生涯

— 朱子学から徂徠学を経て西歐学問の  
摂取へ —

西周<sup>にしあまね</sup>（<sup>(1)</sup>1829-97年）は、山陰の小京都とよばれる小さな城下町津和野の藩士の家に生まれた。その家は、長崎の通詞西家と同宗<sup>どうそう</sup>であり、五代前に大坂で開業していた瘍医時習が津和野に招かれて藩医となり、それ以降父の時義<sup>ときよし</sup>まで代々養子で跡を継いできた。幼名は経太郎で、

(1)本稿においてテキストは、大久保利謙篇、西周全集全4巻、宗高書房、1960-81年によった。ルビをときに施し、また句点を付けた。引用のさいには、たとえば、Iの23ページ、IIIの58ページのように示した。本稿はとくに、上記全集各巻の「解説」と、蓮沼啓介『西周に於ける哲学の成立』有斐閣、1987年とに負うところが大きい。日本の名著34『西周』も参考にした。なお、蓮沼は、西周の原文と森鷗外の『西周伝』とを対置させながら、森が原文を恣意的に改竄していることを示し、説得的に批判している。蓮沼は書く。「鷗外の引用の仕方は、重要な部分を示すために、単に前後を置き換え削除を加えただけにとどまっていな。自らの解釈を完璧にするためであろうか、あるいはこれが文学的フィクションというのであろうか、鷗外は西の文章の造り変えも行っているのである。と

すれば、節録（適度に省略して書きしるす）という表現自体からして見事なフィクションであると言わざるを得ない。なるほど、ただ引用文だけを掲げてあるのであれば、鷗外ほどの文豪のことだから、実は自ら創作したかあるいは手を入れた文章を、あたかも本物の引用であるかのように装っているのではあるまいかと気付く、炯眼の読者も必ずやいるに違いない。しかしながら、節録とわざわざ注記のある引用文に、鷗外の手が加わってようとは、いったい誰が考えつくであろうか。こうした巧妙な技巧を用いて、鷗外は自らの解釈に客観的な真実の外観をまとうことに成功したのである」（49-50ページ）。この点に関心のある方は、蓮沼の著作に拠って、流布している鷗外の『西周伝』が重要な点で造り変えられたものであることを詳細に見られたい。

のちに幕臣の頃には周助を通称としていたが、明治になって縮めて周と改名した。

## 1. 朱子学（崎門派）から徂徠学、そして洋学へ

西周は幼い頃、山崎闇斎の学統（崎門派）につらなる藩儒山口剛斎の高弟であった祖父の時やす雍から『孝経』、四書などを学んだ。12歳のとき、それはちょうど中国でアヘン戦争勃発の年であるが、藩校養老館に入り藩儒山口慎斎に就いた。その頃にはかれは五経を終了しており、この師のもとで朱子の『近思録』や浅見綱斎の『靖献遺言』を学び、自らすすんで二程全書をはじめ朱子学の古典を精読し、居敬静坐を心掛けた。このように崎門派の朱子学に親しんできた周には、朱子学を批判した徂徠学が異端とみえていたのはいうまでもない。その頃、かれには、家業の瘍医（外科医）は賤しい職業と思われてならなかった。

しかし、18歳のとき病気にかかり、異端の書なら床の中で読んでも許されるだろうと思い、徂徠の『論語徴』を手にとったところ、当初はたいへん難しかったものの、熟読を重ね、さらに服部南郭らの編した『徂徠集』にも接するに及び、その朱子学批判の正しいことが分かった。20歳の春に書いた「徂徠学に対する志向を述べた文」のなかで、このときの心境を次のように書いている。「すなわちまた徂徠集を得て之を読む、読むこといまだ一年ならずして十七年の大夢、一旦にして醒覚す。」「是において始めて知る、嚴毅窄迫〔きびしく強く、せまくおしつけること〕の平易寛大に如かず、空理、日用に益なくして、礼楽の貴ぶべく、人欲の淨尽すべからず、氣質の変化すべからず、道統は血脈になぞらえ、居敬は禪定にならぬ、窮理は学者の事にあらず、聖人、人情を捨てざるを。あゝ、前日大沢に陥り、しかして今後これを辟くるを知

る、あゝ夢か醒めたるか、我を喚ぶ者はそれ誰か」と（Ⅰの5ページ、原文は漢文だが、読みくだして引用した）。大久保利謙あきは、西が、朱子学の道統、居敬、窮理を排し、平易寛大を心がけ、日用・礼楽を重んじ、人欲を軽んぜず、人情をかえりみる徂徠学へと志向したことを、かれの「最初の思想的自覚」ととらえている（Ⅰの617ページ）。

西周はこうして崎門派の儒者となろうという志をきっぱりと棄てた。徂徠学はさらに次のように説いている。礼楽の制は、中国の古代に、聖人によって、人情（人間自然の性情）を捨てることなく、それをかえりみながら定められたものであるが、何といっても太古のことであり、いまでは社会の規範や制度は聖人ならぬ常人によって人間自然の性情にもとづくモラーリッシュな力によってつくられてゆくはずである、と。西周もやがてこうした考えを自覚的に択んでゆくことになるのである。ともあれ、当時のかれにとって、まずは徂徠のいうように氣質の性は変わらないとすれば、広い世間のなかでひとはそれぞれもって生まれた氣質にかなうような仕事にたずさわらねばならないだろう、と思われた。前掲の「徂徠学に対する志向を述べた文」によれば、かれはこのようにして、18歳にして徂徠学に傾くことによって、今まで賤技とみなしていた家業を継ぐ決意をしたのである。その間の考えの推移をかれは次のように述べる。「自分の性は愚鈍であり、医は小道といえども、必ず観るべきものあり」、「かつ〔家業として〕天命すでにしかり〔このように瘍医として生まれている〕、また何ぞ苦しみてこれを外に求めんや。ここに及んで、歳すでに十八、医たるの志、はじめて専らなり。」家業は瘍医を専らとしており、医のなかでも瘍医は小のまた小で、賤技であるのはいうまでもないが、奮って、漢法と

蘭法とを併合して、せめて「瘍科一世の宗」たろうと志したのである。周は友人たちと力を合わせてこの研究にとりくむことになった。

ところが、嘉永元（1848）年、20歳のとき、思いもかけず、藩主からかれに儒学修業の特命がくだった。しかも、藩の儒学はかれがすでに離れることを決意した崎門派の朱子学なのであった。かれはどんなに困惑したことであろう。折も折、特命のくだって10日足らずして、愛する母の急逝という悲しみが重なっておこったのであった。そのときの茫然自失のさまをかれは次のように書いている。「今茲〔ことし〕正方始冠〔元服〕の歳、遽かに特命の降るに遭ふ。是に於て十七年の算畫〔計画〕一日にして廃す、狼狽恍惚、茫然手を下す処なきが如し。継いで阿母〔母〕忽然として逝く、嗚呼天命の難枕〔たいへん難いこと〕一に此に至れる耶。余が家固より貧乏にして生業甚だ難し。而して阿母、上は以て我が父を奉じ、下以て吾が兄弟四人の者を育て、食つねに肉羞〔肉のご馳走〕を陳ねて、母体金衣なく、辛勤艱苦して、未だかつて一日として安閑たらず。」さらに、周は、孝を以て報いるいとまもなく母を失ったことを慨く、「余や敖敖〔おごりたかぶり〕の甚しき、漫然として之を省みず、請へらく、阿母今苦勞余年尚お多しと雖も、以て余が異日志の成るを待ちて、其の勞苦に報いんのみと。嗚呼奈如せん命の無常なるや」（Iの4ページ）。周の深い悲しみの語はなおつづき、読者の胸を打つ。このように突如として下った医の廃棄を促す藩命と母の死という二つの重さにたえかねながら、周は、先の決意をひるがえし、藩命にしたがってふたたび儒学に戻ることに決めようと思った。だが、それにしても、藩の儒学は崎門派の朱子学であり、それをかれに期待しているにちがいない藩主の意向\*を思えば、いまや徂徠学を正しとす

る自分の考えとの矛盾の狭間で、さまざまに思い悩まずにはすまない。その結果ついにとにかく、「宋儒の伝註」にしたがい、批判的にこれを読み、思考・推理を重ねて、自分の納得する所、自分の是とする所を説くこととしよう決心するにいたった。すなわち、かれは書く、「然りと雖も、亦ただ人心の同じからざることその面の如し、豈我の是とする所を以て人の是を争うべけんや。然らばすなわち、宋儒の伝註に随い、而して我はすなわち我の是を説かのみ乎」（Iの6ページ）と。こうしてかれはこの年の7月には藩校養老館句読を勤めることになった。

\* 西周が藩主の意向を知人に訊ねてもらったところ、次のように寛容の思いでなおかれに宋学を望んでいるということであった。「上曰く、宋学古学〔これら二つの学のあいだには〕固より別なし。同じくただ修身治国のみ。我の欲するは、彼が学積み、徳成りて、国家の用とならんのみ。亦もって何をか擇ばん。然りと雖も我が藩古きより宋学を尊信す。我願う、彼もまた宋学を為めんことを」（Iの5ページ）。

蓮沼啓介は周がここでも徂徠に学んだことを次のように指摘している。「『吾もまた吾が言に因りて以て宋儒および諸家の説を廃することを欲せざるなり』〔と徂徠は『弁道』で書いている〕。徂徠は決して宋学を学ぶことを排斥したわけではなかった。徂徠学のうちには『宋儒の伝註』に随いながらも推理を詳細にし徹底することを促進するモメントがすでに含まれていた。西は徂徠学のうちからこのモメントを採り出し、批判と懷疑の精神に立つ新しい真理観の上にそれを据え直すという仕事に取り組んでいく」と。思えば、そもそも学問をすすめるために必須のものである批判と懷疑の精神は、わたくしが拙著『日本近世思想史序説』でもみたように、合理性・実証性ととともに、貝原益軒、伊藤仁斎以

来の、日本儒学のすぐれた伝統ではなかったか。蓮沼はつづけて書く、徂徠学のうちから上述のモメントを採り出すということは、「宋儒の『見識』のうち西が考えてなお正しいと思われる部分はどこかを追究し、その推理を徹底させ、不十分な箇所を補い訂正することにはかならない。こうして、いっさいの学問を先王の道の解明に収斂させる徂徠学において政治に従属していた道徳の分野は、再び先王の道の解明から切り離された独自の次元に設定され、治国の学とは別個独立の学として道徳学を再建する道が開かれてくる。徂徠学を貫く公私の分裂は、西にあっては『治人』の学と『脩己』の学、政治学と道徳学の分化と対立という装いも新たに再登場する」<sup>(2)</sup>と。このようにして、西周においては、いまや、政治学・法学と並ぶ独自の領域として道徳学の成立が考えられてくるのである。

ここで述べた転期が、やがて、西周の以後の、啓蒙期の代表的哲学者としての生涯の方向を基本的に決定してゆく。かれはその後、とくにオランダでの西欧の近代社会諸科学の研修をはじめ、いくたの転期を経験するが、そのことを通して、やがて非常に幅の広い百科全書的な学問活動の途が展けることとなったのである。

翌年、かれは、藩から3年間の遊学の許可を得て、大坂に出て後藤松陰の塾に寄宿する等、研学に努めたうえ、一度津和野に戻ったが、その頃、家運はしだいに傾いていた。嘉永6（1853）年に江戸藩邸の時習堂での講釈を命じられたが、津和野に大火があって出発が延び、ようやく7月ペリーの来航の折に江戸に派遣された。その冬、かれはオランダ語の初歩にはじめて接した。翌安政元年26歳のとき、1月にペリーが再度来

航し、日米和親条約が調印された直後、オランダ語を学ぶため、かれは意を決して藩邸から脱走し、杉田成卿、手塚律蔵の塾に通うこととなった。それは、吉田松陰が下田で密出国を企てて失敗した年にあたる。以後、西周は洋学の道にいまやまっしぐらに突きすすんでゆく。このようにして、かれの学問研究の第1期が終わり、いよいよ、かれの力量の全面的な開花をみる第2期、すなわち洋学の時代に入るのである。

## 2. オランダに留学し、啓蒙活動へ

西周は手塚律蔵の塾に住みこみオランダ語の修得に努めるほか、英語にも手を伸ばし、イタリア語にも関心を寄せる。やがて蕃書調所<sup>しんしよきやうじよ</sup>教授手伝となり、外国遊学を切望したが、万延元（1860）年に幕府からアメリカに派遣される外交使節に随行する咸臨丸（艦長は勝海舟）の渡航には加わることができなかった。しかし、かれはその後津田真道<sup>まのみち</sup>とともに幕府の有司に熱心に働きかけ、文久2（1862）年、ついにオランダに留学する機会をうることができた。ときに西、津田ともに34歳であった。同船者の中には海軍留学生榎本武揚らもいた。西と津田は翌年、オランダのロッテルダムに着き、ただちに目的地ライデンに向かった。

\* 文化8（1811）年に幕府の設置した蛮書和解御用の機能をひきついで、安政2年に洋学所が設立され、翌年蕃書調所と改称され、蘭・英・仏の語学や西洋諸科学の教授がそこでおこなわれた。その後、洋書調所を経て開成所<sup>かいせいじよ</sup>となった（西は帰国してまもなく、ここの教授となるのである）。

約2年半にわたるかれらのオランダ滞在と研学の模様について、以下で若干立ちいって述べよう。

(2) 蓮沼啓介、同上書、78ページ。

西周は、あらかじめ船中でしたためておいた書簡を、オランダ到着直後、ライデン大学の日本学教授 J・J ホフマンに送り、留学の目的を述べ援助を頼んだ。江戸の学校では西洋の物理学、数学、化学、植物学、地理学、歴史学などが教えられているが、自分らがオランダで学びたいのは、これらよりももっと必要な学問、統計学 (Statistiek)、法律学 (Regtsgelerdheid)、経済学 (Economie)、政治 (Politiek)、外交 (Diplomatie) などである。しかし、短い滞在期間中にこれら全部を学ぶことはとうてい不可能であるから、それぞれについての詳しいことは後に留学する者に委せることとして、自分らは「要領」をかいつまんで学ぼうと思う。フランス語も学びたい。また哲学 (Philosophie) も修めたい、デカルト、ロック、カント、ヘーゲルらの説を学びたい、と述べている。

ホフマンはかつてシーボルトの助手を勤めた人物で世に知られた東洋学者である。かれは、西と津田のために同じ大学の経済学教授シモン・フィセリングを推薦した。このようにして、西らを丸2年間にわたってフィセリングが指導することになった。西らは、まず3カ月ほどオランダ語を学んだのち、フィセリングの定めたプランにしたがって講義を受けた。その講義は、大学の休日の時を除いて、毎週二夕<sup>せき</sup> (火曜日と金曜日) フィセリング宅で、かれが原稿を読んで講ずるのをふたりの弟子が速記するという仕方でおこなわれた (ただし、かれの専門とする経済学については、自分の著作を用い、必要な箇所を適宜指示することによって講義をすすめ、別に原稿を用意する手間を省いた)。その講義が五科から成り、どのような順序ですすめられるかについてフィセリングがあらかじめ述べた

ところを、西は次のように訳述している。「其學術を講論するは次の序次に於てす。第一に①、性法を論ず、是凡百法律の基礎たればなり。次に②、万国公法、併に③、國法を論ず、是性法を推拡し外は以て諸国の交際を律し内は以て國家の法度に準ずる者なり。後又④、制(製)産學を論ず、是國を富し民を安んず其道如何を教ゆる者なり。而して是を終る⑤、政表に於てし<sup>しかし</sup>而て國の情状如何を察する其周密を悉すの術を以てす」<sup>(9)</sup>(傍点、①②等および句読は筆者の付加)。①から⑤までの五科は、西の希望するところにだいたいにおいて沿ったものといえよう\*。

\* もっとも、西の希望した Philosophie (かれの用語では「ヒロソヒ」) はフィセリングのプランに入っていない。蓮沼啓介は、「フィセリングは『性法』をもって『ヒロソヒ』の代りをなすものと考えていたのではあるまいか」としているが、フィセリングは、この学問は自分の専門を超えるものとしてひとまず除き、前記の五科 (すなわち社会諸科学) の教授に重点をおいたと考えられるのではないか。もちろん「性法」はのちに穂積重陳によって「法理学」とよばれ、法の哲学ともみられうるが、西は、デカルト、ロック、カント、ヘーゲルの説を学びたいと具体的にいつているのであるから、「性法」によってはとてもカバーしえないことは、フィセリングも十分理解していたであろう、と思われる。フィセリングは津田に寄せた五科学習にかんする覚書で「余思ハクハ津田眞一郎 西周助君ノ求志ト其所望ニ応ズルニハ治国学ノ原理ヲ授ルヲ以テ至当トス」(IIの142ページ、傍点筆者)と述べており、2年間の講義プランをそこに絞って、しかも広く五科から組みたてたと、わたくしは考える。

前述したように、西は、津田ともどもにオランダで哲学を学ぶことに当初から意欲を燃やしていたが、フィセリングの講義のなかにはそれ

(3)同上書、107-8ページ。



は組まれていなかった。しかし、かれらは滞在中哲学に大きな関心をいだきつづけ、書物も折をえて読み、視野をなほどこかは広げたであろうと思われるが、詳しいことはわかっていない。おそらくコント哲学など実証主義<sup>ポジティブイズム</sup>の考え方を学ぶことに努めたであろうと推察される。

フィセリングと西・津田とのあいだの人間的な関係がどうであったかについて、蓮沼啓介は次のように書いている。「はじめフィセリングが密かに抱いていた危惧、すなわちオランダ語という壁に妨げられ、ヨーロッパと東洋の思考習慣の違いに災いされ、西洋の政治経済の学は、結局、遠い日本からやってきたこの2人の学者には理解できないのではあるまいかという危惧は取越苦勞であった。そればかりではない。フィセリングはこの2人の日本人が『熱心で親切な生徒』であるばかりでなく、『友人』としても立派な人物である事を悟るのであった。やがて2人が見事に五科の業を卒業した時分には、フィセリングと2人の師弟の間には敬意と親愛の情に溢れた友情が深く育っていた。こうして西と津田の2人は『国治め民富ますの道』『治国学』の要領を学ぶという第一の留学目的を首尾よく遂<sup>は</sup>すことができた<sup>(4)</sup>」(『』内はフィセリングの言葉とされる)。

かれらが帰国したのは、慶応元(1865)年の暮も迫る頃であった。それから約10年、洋学者としての西周の幅広い活動がつづくのである。まず翌年には、西は開成所教授に就任した。しかし、9月には、上洛中の徳川慶喜に招かれてその地に赴き、慶喜のためにイギリスの議院制度や三権分立についての詳しい解説を書き、また大政奉還後の政治体制案を盛った「議題草案」を起草した。かれの開いた洋学塾はたいへんな

人気で、多くの人々が集まった。西はまたフィセリング述の「万国公法」を翻訳し、同じく「性法説約」の訳出もおこなった(万国公法は今日の国際公法であり、性法の原語はNatuurrecht、つまり自然法であり、前述したようにのちに「法理学」の名称をえた)。かれはまた京都で「百一新論」の執筆もおこなった。

西はその後、慶喜の大坂への退去に付き従い、つづく明治元年の鳥羽・伏見の戦に幕府方が敗れた後、慶喜に付いて江戸に敗走した。その後まもなく沼津兵学校の頭取に招かれた。翌々年には新政府から声がかかり、東京の兵部省に出仕し、大学の学制取調御用掛を兼務することとなった。西はここで明治新政府の官途に就いたのである。前者は、かれが以後、陸軍内で昇任し、軍部内で学殖によって大いに活躍する道をひらいたのであり、また後者の関わりから、かれは、明治3年の「大学条例」の起草をはじめとし、後年哲学者として教育畑でも寄与することになるのである。

西は明治3年家塾育英会を開き、特別講義「百学連環」を開始している(「百学連環覚書」はこの講義のメモとされる)。

西の重要な著作といわれる『生性発蘊<sup>34</sup>』第1巻の執筆はほぼこの頃(明治3、4年頃)からと推定される(Iの618-9ページ)。この巻は明治6年に完成(校了)とされるが、出版されなかった。第2巻以降は、使用される予定の翻訳の断片のみが残っていて、完成されなかった。この著作の内容について、大久保利謙は次のように書いている。「第1編の前半はこの書全体の総論であり、同時にこの時西が到達していた哲学的立場を組織的に披瀝したものである。順序としてまず哲学の性質を論じ、さらに西洋哲

(4)同上書、115-6ページ。

学史を概括し、最後に至って今余が宗として本づく所はコントのポジティビズムであると、コント哲学を自分の立場とすることを明らかにしている。そしてこの立場から、この『生性発蘊』は全編コント哲学の解説に終始している」（Iの620ページ）と。

明治6年から8年にかけて、西周は明六社の創設にかかわり、『明六雑誌』への寄稿や演説を精力的におこない、『百一新論』『致知啓蒙』の刊行、「教門論」「知説」「人生三宝論」などを執筆した。また、ヘブンの『心理学』3巻、ついでJ・S・ミルの『利学』を明治10年に翻訳出版した。美について論じた「美妙学説」は明治10年前後における宮中での御前講義の草案である。ほぼこの頃をもって西周の生涯の第2期は終わる。第3期は主として近代軍制の整備と思想の確立に向けられる。

### 3. 近代軍制の確立とイデオロギー

前述したように、西周は明治元年に沼津兵学校頭取となり、同3年には兵部省に出仕し、5年には陸軍大丞にもなったが、とくに明治10年、すなわち西南戦争のち（かれの生涯の第3期となる）、軍事とくに陸軍での活動が目立ってくる。啓蒙思想家であるかれは、制度とイデオロギーとの二つの面でわが国の近代的軍制の確立の仕事にたずさわった。そのさい、山県有朋との関係が密接になった。軍律、軍の官制、軍法会議などについての法規の起草などに携わったが、わたくしがここで重視したいのは思想・イデオロギーの面である。西南戦争以後、自由民権運動の影響が軍隊内部にもしだいに及ぶとともに、対外危機意識も高まってくる時期に、西は、陸軍偕行社内で「兵家徳行」と題する講演をし、また、歴史を談じ軍備の絶対に必要な所以を説く講演「兵賦論」を断続5ヶ年にわたっ

ておこなった。近衛兵の暴動、いわゆる竹橋騒動が起こったさいには、こうした動向に対処するために軍人の非政治性、独自性を説く「軍人訓誡草稿」を起草したが、これはまもなく陸軍卿山県有朋の名で陸軍内部に広く頒布された。さらに、西は山県の依頼を受けて「軍人勅諭草稿」を起草した。これが最初の案となって、その後「軍人勅諭」の成文が発表される（明治15年）までには山県有朋、とくに井上毅<sup>こわし</sup>の思想的介入などいくたの曲折があった。そのため、われわれの今日みる「勅諭」の成文は、西の「草稿」とは基本的な点でかなり異なっている。成文では、天皇の性格が絶対君主にまで高められ、軍人精神は、天皇の下す無条件的な命法に軍人は従属するものとして厳格に確立されるにいたっているが、西の草案ではそこまでいっていない。「草案」と成文「勅諭」とのこのような関係は、同じく山県の委嘱のもとで西の書いた私擬憲法案（明治15年）と公布された絶対主義的な明治欽定憲法（明治22年）とのあいだの相違に照応するものといえよう。——西がこの憲法案を作ったのは、成文「軍人勅諭」の発表された年であり、あたかも伊藤博文が諸国の憲法調査のためにヨーロッパに出発したまさにその年であった。こうして時代は、西周の比較的に穩健でバランスのとれた思想を越えて絶対主義的天皇制の確立に向かって大きく突きすすんでいったのである。

## II. 近代的諸学の体系的な摂取

### ——『百学連環』について——

西周は、オランダで西欧の社会諸科学についての総合的な知識と、新しい実証的な研究方法とを修得し、博識で視野の広い学者として帰国した。

当時西洋の学問をわが国に導入するに当たっ

ては、それを日本語に移すために多くの学問上の基礎的諸概念、したがってまた学術用語を新たに作りあげることから始めなければならず、西周はこの点で寄与するところがきわめて大きかった。そのため、今日西周といえは、主にこのことで有名なのが、一般の理解であるといつてよいだろう。しかし、この面での寄与は、かれが西洋の学問を、哲学から出発して、形式論理学、物理、化学、生物、心理、法、歴史、言語、教育、軍事などの広汎な諸領域にわたって自らのうちにいわば百科全書的に受け入れる過程ではじめて可能なのであった。本稿では、近代的諸学のこうした体系的把握、そして学問の分類のための西周の努力の跡をたどり、その意義を考えてみたいと思う。

## 1. 西洋哲学にたいする関心

文久2年オランダへの渡航の直前に、西は松岡隣に宛てた書簡で、「ヒロソヒの学」（つまり哲学）への関心を述べ、西洋の学問を広く学んでわが国の発展に寄与したいという思いを綴っている。かれはいう、近頃西洋の性理学や経済学の一端をうかがってみると、それは驚くほど公平正大な論であって、これまで学んできた漢説とは大いに出発点を異にするところがあるような気がする。もっとも、かのキリスト教などは、西洋では一般に信奉されているけれども、〔学問として〕とるべきところはないように思われる。これに反し、「<sup>ただ</sup>ヒロソヒ之学<sup>して</sup>ニ而、性命之理を説くは程朱〔宋の大儒、程顥・程頤・朱熹〕ニも軼き、公順自然之道に<sup>もとづ</sup>本<sup>き</sup>、経済之大本を建たるは、所謂王政にも勝り、合衆国英吉利等之制度文物は、彼堯舜官天下〔天下を<sup>つかさど</sup>掌る〕之意と、周召制典型〔周公旦と召伯が定めた模範〕は心ニも超へたりと相覚申候、実に斯道<sup>よ</sup>に由り新政を行<sup>は</sup>わば、国何ぞ富まざらん、

兵何ぞ強からざらん、人民何ぞ生<sup>たのしま</sup>を聊<sup>ま</sup>ざらん、祺福〔幸い〕何ぞ学術に求むべからざらん、百技何ぞ精微を尽さざらんと存じ奉り候」\*（Iの8ページ）と。

\* 西周が、おそらくオランダに向う船中で書いたと思われる「西洋哲学史講案断片」がある。これは途中で中断しているが、古代ギリシア、ローマの哲学についてごくざっと触れたものである。大久保利謙の「解説」によれば、洋書調所（文久2年、蕃書調所を改称）における哲学研究所の所産であろうと思われる。この断片には次のように書かれている。「ヒロソヒ」という語を始めて用いたのはピタゴラスという賢人であり、この語は賢きことを好むという意味といわれる。そして、みづから賢哲〔才知のすぐれた賢い人〕という意味でソヒストと称した人々にたいして、ソクラテスは謙遜してヒロソフルと名のつたが、「語の意は賢徳を愛する人といふことにて、所謂希賢〔賢者になりたいとこいねがう〕の意と均しかるべしとおもはる。此ヒロソフルこそ希哲学の開基とも謂へき大人にて」云々、と（Iの16-7ページ、傍点筆者）。西は、その後「百一新論」でこの「希哲学」という訳語を棄て、漢学との対比において「哲学」の訳語を採った（後述）。

西周は、安政4年5月、津田眞道とともに蕃書調所の教授手伝並となった。この両人は西洋哲学への志向において共鳴しあうところが大きかった。大久保利謙は、津田眞道の稿本「性理論」のために西周が書いた「跋文」についての「解説」のなかで、幕末における西洋哲学の研究の開拓について、次のように述べている。「二人は調所の同僚中でもとりわけ学問、思想に共通するものがあった。文久年間における調所の新学風の勃興、とくに同所の西洋哲学研究への発足も二人の学問的交流の間からおこったといつていい。かかる意味で幕末における西洋哲学の研究は西、津田の二人が開拓者であり、この『性理論』はこれを記念する貴重な資料である。とくにこの跋文〔に〕ある『希哲学』の文字<sup>†</sup>は、哲学の訳語の端緒を語る資料として注目される」と（Iの610ページ）。

† 「跋文」に「西土の学、これを伝ふることす



に百余年、格物舎密〔＝化学〕地理器械等の諸科に至りては、まま其の室を窺う者あり、わが希哲学の一科に至りては、すなわちいまだその人を見ず」云々（同3ページ）とある。

前記、西周の「西洋哲学史の講案断片」については、麻生義輝『近世哲学史』で「日本に於ける西洋哲学講義の第一声」として紹介された。ごく短いものとはいえ、意義深いものであろう。もっとも、これより早く、はるかに詳しい高野長英の無題の遺稿（佐藤昌介がかりに「西洋学者ノ説」と題した）がある。この遺稿については、わたくしは『日本近世思想史序説』（1997年）後篇第4章の3で若干の解説を付しておいた<sup>(5)</sup>が、当時の日本の条件のもとでかなりよい叙述といえる。これは、自然科学分野、とくに医学を専門とする蘭学者高野が自分の研究のためのメモとして書いたものであり、自然学に重点をおいているとはいえ、哲学についての言及にみるべきものがあり、年代的にも、内容的にも、西のこの断片よりも、高野の遺稿の方を、日本における西洋哲学史研究の第一声とみるべきではなからうか。

西周による西洋哲学史の叙述としては『百学連環』第2篇、第1の2「哲学」の(七)「哲学歴史」がまとまったものである。ただし、レウキッポス（アトム論）の弟子にヘラクレイトスをあげるなど、初歩的なミスもある。

いずれにせよ、わが国における西洋哲学研究の当初の諸状況についてなんぴとかがあらためて研究をまとめる必要があろう。

西周はオランダに着くや、留学の目的と要望を述べた書簡をあらかじめホフマンに送り、ホフマンの推薦をうけたフィセリングが、西と津田両人の要望に副うように講義を組織立てて系統のおこない、実りある成果を修めえたことは前述した。従来の漢学の場合とはまったく違うのは、その講義では、学問の内容を、逐次順序立て、明確な命題によって組織的体系的に考察してゆくというやり方であった。たしかに江

戸時代の儒者たちのあいだでも、貝原益軒、伊藤仁斎、新井白石らの頃から、疑うこと、実証的であること、合理的であることの大切さが、かなり唱えられていたが、西欧の学問がその点では方法論的にはるかに徹底的に考察され、鍛えられていることも、西や津田にはよく理解できた（もちろんその頃、かれらわが国の新進気鋭な学者たちが西欧の学問を精力的に受け入れるにあたって、江戸時代の学問のなかでつみかさねられた一定の懐疑性、実証性、合理性、そして思考力が重要な前提となっていたことも、確認しておきたいと思う）。

\* 方法は英語でmethod、オランダ語でmethodeだが、これは、語源的にmeta+hodós (dós) であって、つまり「道に沿うて（したがって）」という意味をもっている。ヘーゲルも『精神現象学』でかれの体系における「事柄そのものの行程」の意味としている。

## 2. 「開題門」その他の哲学断片

おそらく留学中の執筆とみられる試論的な「開題門」（これはいくつもの断片を付載している）の冒頭で、西周は、「東土これを儒といい、西洲これを斐爾蘇比という、みな天道を明らかにし人極〔自然と人間の理法〕を立つ、その実一なり」と書く。儒学もヒロソヒも、天地自然と人間社会を大本から究明することをめざしており、そのかぎりではたしかに同じであると思われる。それでは、どうして彼我の学問はこれほどまでに根本的といえるほど違ってきたのか。オランダでフィセリングの講義を聴き、好個の学友・津田眞道と日夜議論を交しては、西はつねにこの相違がどこからくるかを思い、また自分らはここまで来て何をめざしているかをくり

(5) 拙著『日本近世思想史序説』下、1997年、375-81

ページ。

かえし考えた。これが、この小論の執筆される所以であろう。

そこで西は、彼我の学問、すなわち、儒学と「ヒロソヒ」とを真正面から対比する。そして、西洋の哲学史を古代から簡単に想起し、やがてベーコン、デカルトが出て、さらにロック、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、またその合理論を経て、近年になってポジティヴィズムがおこり、その「拠証確実」、「弁論明哲」ということが大いに以後の研究者の助けとなってきたことに注目し、このようなことはアジアではまだ見られないことであると述べ、この点でとくにオーギュスト・コントとジョン・スチュアート・ミルの名をあげている。そして、儒学と対比しながら、経験論の基礎のうえに展開される西欧の学問の全貌を理解するために、「百学」すなわち全学問の区別と連関、相互連関（いいかえれば、全学問の研究順序、体系的な構成）を明らかにしようとするのである。これは、どのように西洋の学問を研究してゆけばよいかという問題への、大きな見通しをつける道ともなるであろう。

そこで西は、氣と理との別を考え、氣科、すなわち自然の諸現象たる気を研究する学と、理科、すなわち人間の内的世界（ある哲学断片での西の用語でいえば「内天」（Iの217ページ）の理を探求する学とを区別する。そして、氣科を攻めたのちそれとは異なる研究分野たる理科に及ぶという研究順序を考える（「氣科の成功に因って理科の蘊奥を開く」とかれは書く（同23ページ）。ここには、宋学の研究手法たる「格物窮理」という、物と理とを連続させて捉える探求法にたいする否定がみられる。

西はさらにすすんで、全学問研究の体系化を考える。そして、観行二門（すなわち、観照＜＝理論＞的部門と実行＜＝実践＞的部門との二部

門）の別\*を考え、さらにそれを次のように細分する（横文字はオランダ語）。

#### 観門（理論的部門）

原学 學術相関渉の理を論ずる  
原思 思弁論議の法を論ずる logica  
原性 心性の理を攻める psychologie  
原天 天地の故（然る所以）を觀じ、万有の情（事情）に通ずる cosmologie

#### 行論（実践的部門）

行原 脩己の要道を論ず moraal, ethiek  
政原 治人の要を論ず politiek, sociologie

\* 観行二門の別は、西欧のアリストテレス以来のテオリア（観照・理論）とプラクシス（実践）との区分と照応している。

西周は、このように諸学の研究を体系だてることによって、朱子学と徂徠学とから離脱して、西欧の新しい学問に臨むための基本姿勢を確立してゆくのである。西は「生性発蘊」その他でも学問の問題を考えているが、本稿では省略して先を急ごう。

### 3. 「百一新論」

「百一新論」は、西周が上洛中の慶喜の側近にいた頃に執筆したものであるが、鳥羽伏見の戦を経て主君とともに江戸に敗走するさいに自筆の稿本は紛失したものとみられる（ちに山本覚馬の序を付して写本をもとに明治7年に刊行されたが、これに西の加筆があるかどうかは分からない）。この著作で西は、孔子以後、政と教とを混同していわゆる「脩身齐家治国平天下」\*を掲げ、国家統治の教なるものを唱えるにいたった後儒を批判し、これにたいし政と教との分離——「治人の道」と「脩己の道」との区別——の必要な所以を詳細に論じている。西によれば、たしかに法（あるいは政）と教はと

もに人の性にもとづき、人の性上から本源をとるものであるために混同されやすいが、両者は異なるものであり、正直公平という考えが法のもとをなすのにたいし、善美能好という考えが教の基礎になっている。とはいえ、かれは、両者の区別をあくまで力説しながらも、同時に、両者は二途であるが、しかし一致することをも指摘しており、わたくしはこの点も重要であると思う。なぜなら、「[法あるいは政と教との]二ツノ者が共ニ帰スル所ヲ同ジウ致サネバナラス、其帰スル処ノ一致ノ目的ト申スハ、洋語デハハルモニート申ス、兎角ニ人間世界ノ大和ヲ要スル」のであり、いいかえれば、「人間世界ヲ大和ノ域ニ保ツ」<sup>(6)</sup>(Iの267ページ)ことが政と教との両者の目的だからである。

\* 『大学』に「身脩まりてしかるのち家<sup>ととの</sup>齊う、家齊いてしかるのち国治まる、国治まりてしかるのち天下平らかなり」とある。ここからいわゆる「脩身齊家治国平天下」の句が出た。これによれば、平天下を実現するためには脩身から出発してこの順序で実践してゆかねばならぬとされる<sup>(6)</sup>。つまり「脩己の道」と「治人の道」とが一<sup>ひとつ</sup>繋がりとなり、個人の道徳が国家統治の教のなかにとりこまれてしまう。

西は次に、物理と心理との区別に論を移す。まず、理とは何かを考える必要がある。かれによれば、よく一口に道理だの理だのといわれるが、理には二通りあることを知らねばならぬ。すなわち、物理と心理との別であり、これを一緒くたにしてはならない。一方の物理とは、天然自然の理のことであり、大なる天地も遠い星も、一滴の水一撮<sup>ちやく</sup>の土も、禽獣や人間などの生物も、植物も、みなこの性をそなえこの理に<sup>もと</sup>戻することはできない。これにたいして、他方の心理は、人間のみぞくし、人間のみがその理を

理解して遵奉することができる。これもやはり天然ではあるけれども、ひとはこれに<sup>たが</sup>違ふことも<sup>もと</sup>戻することもできる。とはいえ、この理は、勝手に作りかえることも、やりかえることもできない。物理はア・プリアリ・先天の理であるが、心理はア・ポステリオリ・後天の理である。

西はいう、「先ヅ先天ノ理ニテ人間ト云フモノガ出来テ、其人間ニ就テ後天ノ心理ガ自然ニ備ハル故ニ之ヲネセシテイト云ツテ、已ムヲ得ザルニ出ヅルノ理ト申スデゴザル、併シ此理ハ先天ノ物理ノ一定動カス可ラザルモノトハ違ヒ、一事ニ就テモ千差万別ト色々ガゴザル、其<sup>こゝ</sup>処デ其中ノ至当ト云フ所ヲ擇ンデ執ラネバナラスデゴザル」(Iの278ページ)。ひとは不義・不道を犯すこともできるし、不義・不道を犯しても天網を逃れることもできる。心理にはまた両極があって、一方を善といえばその裏は悪となり、一つを正といえば他は不正となるが、両極のあいだには程度の相違もある。また、時や処、人や位による、等々で、千差万化で測りがたいものがある。とはいえ、心理も、後天でありながら天(自然)によってこのようになっているのであり、造りかえることもできぬ。行といてもやはり人間には同一の性が備わっているといわねばならぬ。たとえば、打たれたり蹴られたり、あるいはひどく他人から見下げられたりして、嬉しい者はおらぬ。そこで、自分が打たれてはならぬと思うところから、人を打ってはならぬという義が生ずる。このようにして人間に自主自立の権が生ずるわけである。また、自分の物を奪い取られたり盗み取られたりすれば、<sup>にく</sup>悪み怒る情が起る。そこから、人の所有物にいわれなく触れてはならぬという義も生じてくる。そこで、人間に<sup>もとの</sup>所有の権も生ずるわけであ

(6)新釈漢文体系2『大学・中庸』赤塚忠、明治書院、

1967年、11-12、44-47ページを参照。

る。こうしたことが法の根元となる。西は、これと同じようにいろいろと例をあげて考察し、人間に同一の性があることから、仁道の根元や、教の根元を説くのである。かれにとって、物理と心理との区別はこのように重要なものであるが、次に、それではこれらの教（いまや心理にぞくする学といってもよいであろうが）には物理を参考にするところはないのか、を考える。

西はこの問題を考えるために、前述した「開題門」における観行二門（理論的部門と実践的部門）の別にたちかえる。行門はもっぱら性理にもとづくものであるから物理の論には及ばないが、観門の方では、人間も自然界の一物である以上、物理を参考としなければならぬ。物理はそもそも、造化史〔大自然の歴史〕の学を主とする。造化史は、金石・草木・人獣（人間と禽獣）の三域について諸種の理を論じ、地質学・<sup>パレントロジー</sup>古体学などから大地形成に及ぶ。また、比較解剖学、生理学、人種学、<sup>テオロジー</sup>神理学、<sup>エステチクス</sup>善美学等々をあげる。「総て箇様ナコトヲ参考シテ心理ニ徴シ、天道人道〔宇宙の理法と人間の規範〕ヲ論明シテ、兼テ教〔学〕ノ方法ヲ立ツルヲヒロソヒ一、訳シテ哲学ト名ケ、西洋ニテモ古クヨリ論ノアルコトデゴザル」（Iの289ページ）とかれはいう。

ここで、わたくしはなお次の二つの点に注目しておきたい。一つ①は、ここでの諸学の分類、その総合的把握の試みであり、これは、後述する『百学連環』に先駆するものである。そして、物理として造化史の学をまず掲げ、大自然を歴史として捉える点を重視していることにもあわせて注目しておきたい。もう一つ②は、西周が、ヒロソヒ一に「哲学」という訳語をつけたということである。すなわち、当初から使ってきた「希哲学」という訳語をやめて、ここで、儒学と対比しながら新たに「哲学」という訳語を採っ

たのである。従来儒学で扱ってきた天道や人極、すなわち自然と人間の理法の研究は、これを全面的に批判したうえで、総体としては、結局この哲学に帰するということである。

さいごに西周は次のように結ぶ。「今〔本稿で〕百教ハ一致ナリト題目ヲ設ケテ〔百は一となるとの新しい論、つまり「百一新論」と題して〕、教ノコトヲ論ズルモ種類ヲ論ジトラバ此哲学ノ一種トモ云フベクシテ、〔従来から学者たちは諸学について〕仔細ハ〔細かくわけて〕若シーツノ教門ヲ奉ゼバ其教ヲ是トシ、他ノ教ヲ非トスル〔自分のたのむ教門にそれぞれ固執して互に争いあう〕コト常ノ事ナルニ、〔これとはちがって本稿で述べたように考えて〕百教ヲ概観シテ同一ノ旨〔百の異なるなかに同を把握する旨〕ヲ論明セントニハ〔このような見地をとろうとすれば〕余程岡目ヨリ〔かなり離れて局外からいわば鳥瞰的に〕百教ヲ見下サネバナラヌコトデゴザル。故ニカカル哲学上ノ論デハ物理モ心理モ兼ネ論ゼネバナラヌ事デゴザルガ、兼ネ論ズカラト云ッテ、混同シテ論ジテハナラヌデゴザル」（同ページ）。すなわち、諸学をそれぞれの理の、相互連関（相互「関渉」とかれはいう）のうちに捉えること、いいかえれば、それらを、区別と連関、そして、同一の関係において、いいかえれば結合・統一において考察すべきことを、西は主張しているのである\*。これが次にくる『百学連環』の基本的視点となるのである。

\* 麻生義輝編『西周哲学著作集』（1933年）の「序文」で、井上哲次郎はこの点の意義について次のようにいう、「〔西周は〕己に明治7年に『百一新論』を著わして百教皆哲学によって総括せらるべきことと論じたのである」（Iの「総説」30ページ）。

#### 4. 『百学連環』

西周は、明治3年、沼津から東京に出て兵部

省に出仕するかたわら、家塾育英社を開いた。塾では毎日英語、数学、国学、漢文などの普通講義をおこなったが、それとは別にかれは『百学連環』と題する特殊講義を月6回ほどの割合で連続してすすめた。かつてオランダでフィセリングから社会諸科学について体系的な講義を聴き西洋の学問の有り様を体験したかれは、この学問をよく摂取するためには、自分に必要な専門をたんに個別的・散発的に学ぶのではなく体系的な連関において知ること、それによって個々の専門を全体のなかに位置づけながら個別的に研究をすすめることが大切であると考えていたのである。ライデンの大学を見学して、大学の講義とはそういうものであることもいっそう痛感したことであろう。『百学連環』は、したがって、かれが西洋の学問、その哲学に関心を寄せて以来、オランダ留学を経て、帰朝後とくにはっきりと自分の課題として考えつづけてきた問題、すなわち西欧の学問の、理に適った分類による、体系的把握の問題についての大きな成果とみることができるであろう。

『百学連環』については西周の書いた稿本はもともとなく、その講義を聴いた門人永見裕の筆録本（2種類があるが、ともに欠落部分がある）と、西が講義のさいに使った自筆の覚書とが残っているだけである。しかし、それによって全貌をかなりよくうかがうことができる。

『百学連環』は、まず冒頭の「総論」Introductionで次のように書いている。「英国の Encyclopaedia なる語の源は、希臘の *Εγκυλος* (▷ *Εγκυκλιος*) *παιδεια* なる語にして、即其辞義は、童子を周輪の中に入れて教育なすとの意なり。今之を訳して百学連環と頷す。元来西洋法律等の学に於いては、総て口訣〔秘訣の口授からここでは学理の口述の意となっている〕するの教なりと雖も、此の Encyclopaedia なるものを

以て、口授するの教へあるにあらざ、然れども、英国に Encyclopaedia of political science なる語を、訳して政事学の連環と称し、即口授するの教へあり。故に今之に倣ふて、浅学の者を導かむと欲する、余が創見に出る所なり\*」(IVの41ページ)と。西がつづけていうには、しかし、ヨーロッパには Encyclopaedia という書籍はたくさんにある。イギリスなどでは alphabetical といって、つまりイロハと同じように、あちらのABCなどの特徴でタームを区分し、もろもろの学科を引き出す書籍がおおよそ12冊ある。こうした書は、百般の学科にわたるものであるから、いちいちの学科について内容を枚挙的にのべるわけではない。ここで自分がおこなうのも、ただ学術に相関渉する点をあげ、あわせて和漢のことも考慮しながら説くのである、と。同時にかれは次のことも注意している、凡そ学問には学域というものがあって、地理学には地理学の域があり、政事学には政事学の域がある。その域を踏み越えて混雑させてはいけない、と。

\* この引用文中綴りは西周にしたがう。

『百学連環』で述べられる内容の大綱にかんしては、大久保利謙編西周全集第4巻の始めに、永見本に依拠して編者が作成して掲載した総目次がある。わたくしは基本的にこの総目次に據り、ただ紙幅のために細目の点について省略したものを、本稿の末尾に掲げたので、以下のわたくしの叙述にかんして参照されたい。

この総目次にみられるように、大きな分類としては、普通学と殊別学との別がある。これを西は自分の立案であるとしている。「総論」で西は、「普通とは一理の万事に係はる〔すなわち一般的なもの〕を言ひ、殊別とは唯<sup>ただ</sup>一事に関するを云ふなり、譬へは算術の如きは、今日の小事より其他種々の大事に関渉す、是即ち普通



なるものなり、本草学及び窮理学の如きは殊別にして、歴史、地理学の如きは是レ所謂学の普通（一般的）の性質なるものなり」（IVの67ページ）と書いている。さきに「百一新論」でみたところの心理と物理の区別は、殊別学の二分のさいに「心理上学」「物理上学」（今日いう、人文科学と自然科学）としてここで適用されている。観門と行門との別については、むろん背景にはあると考えられるが、総目次のうえには現れていない（総目次中、第二編の第一「心理上学」、その二「哲学」、その三「政事学（法学）」、第二「物理上学」の項を参照されたい）。

第一篇「普通学」は、歴史・地理学・文章学・数学の四科から成っている。歴史と地理学は、時間と空間を軸に事象をとらえるものであり、歴史を普通学の最初に置いたところに、西周の歴史にたいする重視の姿勢がうかがえるであろう。大久保利謙は「解説」のなかで、次のように書いている。「〔右にあげた〕四学中歴史を第一としたのはあらゆる学問は、その対象が歴史的なものであるとともに、学問そのものも素朴なものから精密なものへと発達する進化物であるというのである。これは一種の歴史主義で、その由来は西の学問観からきているのであるが、その根底には江戸儒家の史論思想があり、事実を尊重する荻（荻生）徂徠の歴史思想の影響も考えられよう。この歴史を横にひろげると地理学となる。さらに文〔章〕学と数学は諸学共通のロジックでありメカニズムである。この四つを合せて普通学を構成した」\*（IVの607ページ）と。大久保はさらに、西の学問論の根底には、西独特の言語論、文法論のあることを指摘している。

\* 西周はその後学問の分類の問題に関心をもち

つづけ、『明六雑誌』に連載した「知説」では、学問を「普通ノ学」「物理ノ学」「心理ノ学」に三分し、また、『百学連環』における普通学の前記の四分にかんしては、順序を変え、文学・数学・史学・地学とした。つまり、文学・数学を上位に据え、史学・地学を下位に落とした。端的にいえば、文学と史学とについてその位置を逆転したのである（どちらを重視するかの、根本的な見解の変化——つまり文学の先行、史学の後退——がここにみられる）。明治12年の東京学士会院の例会での講演「日本文学会社<sup>1</sup>創始の方法」では、院内での諸学科を、心理にぞくする諸学と、物理にぞくする諸学との二科に分け、文学と数学とを、それぞれ、心理上の諸学と物理学の諸学<sup>かしら</sup>の頭に据えた。しかも、これら文学と数学の二科は、なお、諸学を貫通組織する学術として心物二理の両辺に亘るとして、普通学（一般学）の性格をもつように考えているが、史学はそのような性格をもつことなく、心理にぞくする諸学の一つ、つまり殊別学の一科とみなされることとなった。これは、大久保利謙も指摘するように、西における歴史主義の後退といえよう。†「会社」というのは、同人の会の意味、学会とみてよい。『明六新説』第一号に、次の文言があるので、参考までに引用しておく（傍点を付した）。「本朝ニテ學術文芸ノ会社ヲ結ビシハ今日ヲ始メトス。而シテ社中ノ諸賢ハ皆天下ノ名士ナリ。人皆謂ハン、卓犖〔このうえなくすぐれている〕奇偉ノ論、千古不磨ノ説ハ必ず此会社ヨリ起ラント。何トゾ諸先生ノ卓識高齡ヲ以テ、愚蒙ノ眼ヲ賞シ、天下ノ模範ヲ立テ識者ノ望ヲ曠ウセザランコトヲ是祈ル。」<sup>(7)</sup>

## 5. 諸学の体系化の歴史的意義

さいごに、西洋近代諸学の体系的把握のための西周の研究の意義について考えておこう。

### (1) 当時の日本の諸条件

#### ① 客観的条件

幕末から明治初年にかけて、諸外国から近代

(7) 明治文化全集、第五巻、雑誌篇、第三版、1968年、

58ページ。

的諸学が個別的にしかも急速に多量に導入され、日本の知的状況は、驚くほどの変貌を遂げた。そしてこの状況は爾後ますます加速度的に進展してゆくことが予想された。じっさい、このことは日本の近代化のために必要不可欠なことであった。なかんづく、それら最新の諸知識、さらに広汎な文化をまづもって政治・軍事・経済・生産等々の諸分野に精力的に利用するという要求が急速に高まったのはいうまでもない。さらにまた自国の次に来る世代のための教育制度を、初等から高等にいたるまでしっかりと整備することも、急務となった。こうして、事態は、芸文、言語、歴史、したがって結局は国民の生活の全般に及ぶのであった。もちろん、そのさい、長い歴史的伝統をもつ自国の多様な学問・文化を当然にも前提し、尊重し、それとの結び付きを計ることも大切であるが、とにかく圧倒的なほど多様で異質な、しかも清新な諸知識が導入されねばならなかった。そうであれば、これらの新知識をたんに多様・多彩なものとして、いわば雑多なままとしておくのではなく、自分らに納得がいくような仕方でこれらを、相互の区別と連関をもって統一的、体系的に理解すること、把握することが、どうしても欠かせない課題とならざるを得ない。こうした客観的な情況が目前に迫っていた。

## ② 主体的条件

西周は、すでにみたように、かれ自身、その学識生涯を朱子学の修得から出発し、徂徠学によるその批判から大きな衝撃を受け、さらに幕末期の国際的・国内的な激動の波に促されて洋学を志向するにいたり、ついに念願の外国留学を果たし、オランダでの留学によって、西洋近代社会諸科学の大綱を総合的に研修することができた。かれは、このようにして、かれをとりまく条件の展開に応じて、そのつど自分の修得

した学問をふりかえって、これを批判的に検討しつつ前方に向かって乗りこえていった。そのさいかれは、西欧の諸学のなかでも普遍的な学としての「ヒロソヒ」(=哲学)にとくに関心を寄せ、同じく斯学に着目する俊秀津田眞道を身近な友人としてもったということも、幸いしたであろう。西もまた津田に劣らぬ俊秀であったが、かれは、特殊な分野に深く切りこむというよりか、むしろバランスよく多面的な領域へと広く目配りよく向かうという学風をもっていた。こうしてかれは、だれに促されることもなく、やがて『百学連環』へと実る諸学の分類と統一的把握という課題を、おのずからに選んだのであった。これがかれの主体的な条件である。

西周は、諸学の体系を考えるのに、まず、実践的と理論的という主体(人間)と客体(対象)とのあいだの関係についての区別に着目する。ここから学問には、観門(観照的=理論的部門)と行門(実践的部門)との区別があるとする。つぎに、客体(対象)のあいだに区別があるとし、そこから物理と心理との区別を導く。さらに、従来の儒学で応々にして混同して捉えられていた政(「治人」)と教(「修己」)との区別を指摘する。さらに、もっと大きくは、前述したように学問の関係する領域の広狭、すなわち万事に関わるか、特殊な一事に関わるかの相違から、普通学(一般学)と殊別学との区別があるとする\*。

\* 紙幅の都合上本節でわたくしの扱わなかったものとして、学と術、単純(純粹)な学と適用(応用)の学などの相違、また規模(体系) system と方法 method などの重要な区別を西周は指摘している。

西周が『百学連環』以後も、諸学の統一と分類の問題におりおりたち戻って考え、新しい見解を提示していることをわたくしはさきに一言

した。この問題は、決して固定的な仕上げをもって終わるものではなく、かれ自身にとっても開かれた課題なのであった。

## (2) 『百学連環』と『学問のすすめ』(福沢諭吉)との相違点

西のこの業績について、これを福沢諭吉の『学問のすすめ』と対比する大久保利謙の次の指摘(全集第4巻の「解説」)は、重要であると思う。やや長いが引用しよう。「『百学連環』は私塾育英社における学問概論の講義ともいふべきものである。ところで、この講義が対象とする『学問』、『學術』は、もとより日本旧来の儒教的ないわゆる『道』の学び、または古典の学びというようなものでなく近代の学問であるが、さりとて福沢諭吉が『学問のすすめ』で説いた『人間普通日用に近き実学』というような日常的な実用知識でもなく、高度の西洋近代学術 Science, Wissenschaft のことである。これを『百学連環』といったのは西洋の Encyclopedia からきているので(総論冒頭)、西洋の諸学問を一貫した体系のもとに組織的に講述しようとする試みなので、内容的に専門的ではある。『童子を輪の中に入れて教育なす』とある。つまり大学的授業を目的とした童子を大学生と考えればよい。基礎講義といったもので、当時の日本としてはまさに破天荒な試みといわなければならない。これは、幕末のオランダ留学に由来するもので、フィセリング・ライデン大学教授からうけた五科の学習、さらに西洋の諸学の在り方、学問の方法を学んだ結果であった。」

「そこにはまた、伝統的な朱子学的思惟様式の打破の必要も考慮されていたので、これが心理物理による積極的な新しい学問の組織論、体系論となった。この立場は、この後の『知説』(明治7年)によって知識論、認識論としてな

お深められている。これは西生涯、または学問上の最大の課題であったといえよう。」

「そういう点で、同じく啓蒙家であっても、『人間普通の実学』を説いた福沢諭吉とは、その啓蒙の立場が対照的であって、具体的には『学問のすすめ』とこの『百学連環』の対照となる。また教育の面では、小学校の普及とユニバシティの創設となる」(592-3 ページ)。

## (3) 『百学連環』の意義

### — フランシス・ベーコンとの比較 —

なお、もう一つの重要な問題についてわたくしは考えたい。それは、わたくしが西周のこの課題に関わるあいだずっと念頭を去らなかつた、フランシス・ベーコンによる学の分類との比較の問題である。直観的にいって、両者における客観的・主体的諸条件の差異はたしかにかなり大きい。しかし同時に、課題意識には、なにがしか類似した側面もみられる。これをどう考えるかという問題である。そこで、ベーコンの場合についてまず考えてみよう。

17世紀初頭のイギリスにあって学問の「大刷新」をめざして学問の分類をおこなった、フランシス・ベーコン(1561-1626年)の著作『学問の進歩』(1605年)について、山崎正一は次のように語る。「ベーコンの哲学のうちに具現されている精神を最もよく言いあらわす一つの言葉を求めるならば、それは『展望する精神』ということであろう。ベーコンは広く当代を見渡して、人類が現在までに有している知的財産の一覧表を、即ち、財産目録を作ろうとする。人類の現在の状態において、何が欠けており、何が補充せられるのが望ましいか、それが一目でわかるような目録をである。ベーコンは1605年に『学問の進歩』を公刊してこの課題にこたえた。ベーコンの展望する精神は、ここで最も

よくその本領を發揮している。彼は、学問を枚挙し分類し整理して見通しをつけようとする。こうした枚挙分類の事業に、ベーコンは多大の労力と情熱を注いでいるかに見える」<sup>(8)</sup>と。

そこで17世紀の初めに40歳を迎えた、ロンドン名門の生まれのフランシス・ベーコンをとりかこむ、イギリス、さらに広くヨーロッパの学問的諸条件を考えてみよう。

イギリスと哲学との関わりについていえば、イギリス諸島のうちで9世紀最初の四半期にきわだって思想文化の活況を呈していたアイルランド\*に、その南北いずれかは分からぬが生を享け、のち大陸に渡って、いわゆるカロリング・ルネサンスの第2期に活躍したヨハネス・エリウゲナがおり、その後イングランドでは11世紀末カンタベリー大司教をつとめたアンセルムスがひととき名高く、13世紀ともなれば、オックスフォード大学の創始者ロバート・グロステスト、その弟子で、数学的方法と実験とを結合して自然研究の方法論をうちたてたロジャー・ベーコン\*\*がいる。かれは人間の無知と失敗の原因として権威への服従や一般的偏見などをあげてフランシス・ベーコンのイドラ（幻影）説を先駆する思想を述べてもいる。さらに13世紀末から14世紀にかけて、ドゥンス・スコトゥス、ウィリアム・オッカムら、著名な哲学者が輩出した。他方、ヨーロッパ大陸では、かのカロリング朝ルネサンスのエリウゲナ以後におけるスコラ哲学の発展、13世紀ともなれば、アウグスティヌス主義のボナヴェントゥラ、アルベルトゥス・マグヌス、またイスラムの学問を摂受するラテン・アヴィセンナ主義、ラテン・アヴェロエス

主義\*\*\*がおこり、パリ大学を中心舞台としてトマス・アクィナスとシゲルス・デ・ブラバンティア\*\*\*とのあいだで13世紀最大の哲学上の大論争がおこなわれたことは有名である。

\* 当時のアイルランドにおける文化の活況はヨーロッパのなかでとくに目覚ましいものであった。今義博によれば、「アイルランドはただひとり西欧でゲルマン民族の大移動の混乱を免れて、ギリシア・ローマの古典文化やキリスト教が維持されたところで、すでにエリウゲナの幾世代も前から、アイルランドの知識人は荒廃したイングランド島や大陸にそうした文化を移植・普及させ、また、カロリング・ルネサンスにおいてもその中核的存在として多大な貢献をしてきた。そのため、後世アイルランドは『聖人と学者の島』と称されることになる。」<sup>(9)</sup>

\*\* ロジャー・ベーコンに次の有名な言葉がある。「すべては実験に依存する。」「もし数学を知らなければ、この世界のものごとを認識することは不可能である。」これらの言葉からも、すでに13世紀前半に実験や観察、厳密な数学的論証を重んずるオックスフォード学派の科学的精神をうかがうことができる。

\*\*\* アヴィセンナ主義およびアヴェロエス主義（パリにおける後者の代表的哲学者、シゲルス・デ・ブラバンティア）は、それぞれ、12世紀後半頃から13世紀にかけて、東方コンスタンティノポリス（今日のイスタンブル）、またとくに西方イスパニアのコルドバなどを経て中世ヨーロッパに流れこむ、イスラムの哲学者アヴィセンナ（イブン=スィナー）とアヴェロエス（イブン=ルシュド）の学説・思想をキリスト教のうえにとりこむことによって成立した<sup>(10)</sup>。

フランシス・ベーコンは、このようにイギリスの、そして広くヨーロッパ中世以来の、いや

(8)山崎正一「フランシス・ベーコン—生涯と思想」、世界の大思想6『ベーコン・学問の進歩、ノヴム・オルガヌム・ニュー・アトランチス』河出書房、1966年、「解説」476ページ。

(9)今義博『ヨハネス・エリウゲナ「ベリフェセオン

(自然について)』の「解説」、中世思想原典集成6、平凡社、1992年、475ページ。

(10)拙著『ヘレニズム・ローマ期の哲学』未来社、1995年、256ページ。

さらにいえばギリシア・ローマ期以来の、哲学的宗教的世界の展開の土壌のうえで活動をおこなった。近代的な自然科学もしだいに発展してきて、まさに今後の哲学・科学・技術の大きな発展が期待され展望される時期に際会していた。このようにヨーロッパとイギリスの近代的な学問の、いわば自前の——これがわが西周との基本的な条件の相異である——発展のさなかにベーコンはいた。ベーコンの功績について桂寿一は端的に次のように書いている。「ベーコンは、政治や道德などに関する論集によっても知られているが、彼の名を哲学史上不朽にしたのは広い意味の科学論である。スコラの学問に対して新たな科学の性格や方法について検討し、いわゆる経験主義の思想の基を開いた点にあるであろう」<sup>(11)</sup>云々。

それでは、西周の場合はどうなのか。この問題を考えるために、次の点を視野にいれよう。なんびとも学者の業績の評価を、その活動した具体的な地域と時代からきりはなし、たんに地球上での抽象的な空間・時間の座標軸のなかでのみおこなうことはできない。もちろん、たとえば、だれが万有引力の法則を発見したか、だれが一般相対性理論を発見したか、だれが波動力学を発見したか等については、具体的な歴史的な時代を捨象して、抽象的な座標軸をとって時系列上に並べてみるができる。発見の時間的順序はかわりえないし、このような年表もたしかに有用である。しかし、学者の業績について歴史的な評価をおこなうためには、このような意味のほかに、具体的な地域と時代において、どのような具体的な諸条件のもとでその業が企てられ成ったかをたちいって考察する必要がある。ベーコンの場合、地域はイギリスであ

り、ヨーロッパであった（近代科学はここでいち早く自前の展開をとげ、未来への力強い発展を望んでいた）。これにたいして西の場合、地域は日本であり、東アジア、——より広くみてもアジアであろう。これらの地域は、ヨーロッパからはるかにおくれしており、近代をめざす自前の成果を欠き、ヨーロッパから先進的な学問を一から学びとらねばならなかった。少くも、われわれはここで、アジア、とくに東アジアにおいて日本は、幕末期に、とくにアヘン戦争（1840—42年）以後、アジア諸国、諸地域が政治的・軍事的・経済的な圧力を欧米諸国から強く受けていたなかで、ひとり植民地化することなく近代諸科学を積極的に導入し近代化への道を他に先駆けていち早くとることができたという歴史的な時期に、西周の、いま問題とする科学論上での「百学連環」という学問の分類が企てられたことを確認することができるだろう。そして、西の業績が日本の近代化のために寄与するところがあつたとすれば、そのことは、東アジア全体における近代科学受容の歴史のなかで、小さくはない意義をもつということができると思う。

#### 付載

『百学連環』の総目次

——西周全集第4巻、冒頭の11—22ページより省略をして借用——

注記〈〉内は、ここでわたくしが施した省略にかんする若干の注記である。

#### 総論

緒言 百学連環の意義

学域

学術技芸（学術）〈細目略〉

学術の方略 Means 〈細目略〉

(11)桂寿一『西洋近世哲学史』岩波書店、1951年、69

ページ。



新致知学 <John Stuart Mill 帰納法 Induction  
演繹法 Deduction>

真理 <Positive Knowledge, Negative Knowledge  
コントの三段階説 規模 System  
方法 Method 普通学 殊別学 心理上学  
Intellectual Science 物理上学 Physical  
Scienceなど>

第一編 普通学 Common Science

第一 歴史 History

緒言

一 正史 History

二 編年史 Chronicle

三 年歴箋 Annals

四 史料 <記録 伝>

五 正史 <万国史 (古史 中世史 晩近史) 各  
国史>

六 通古学 Archaeology

第二 地理学 Geography

緒言

一 数学上地理学 Mathematical Geography

二 物理上地理学 Physical Geography

三 政治上地理学 Political Geography

第三 文章学 Literature

緒言

一 語典 Grammar <細目略>

二 形象字 Hieroglyph

音字 Letter <細目略>

三 文辞学 Rhetoric <細目略>

四 語源学 Philology

五 詩学 Poetry <細目略>

第四 数学 Mathematics

緒言

一 単純数学 Pure Mathematics

二 適用数学 Applied Mathematics

三 算術 Arithmetics

四 幾何学 Geometry <三角測法>

五 分解法 Analysis <点竄 Algebra 微分  
算法 積分算法など>

第二編 殊別学 Particular Science

緒言

第一 心理上学 Intellectual Science

緒言

一 神理学 Theology

緒言 (一)日本

(二)支那 (三)天竺

(四)百兒西亜 (五)小亜細亜

(六)耶蘇教 (七)回々教

二 哲学

緒言

(一)致知学 Logic

(二)性理学 Psychology

(三)理体学 Ontology

(四)名教学 Ethics

(五)政理家之哲学 Political Philosophy

(六)佳趣論 Aesthetics

(七)哲学歴史 History of Philosophy

(八)実理上哲学 Positive Philosophy

三 政事学 (法学) Politics, Science of Law

緒言

(一)万国公法 International Public Law

(二)万国私権通法

International Private Law

(三)確定国法 Positive Law

(四)私権 *droite privé*

(五)公権 *droit publique* <立法権 行政権  
断定権>

四 制産学 Political Economy

緒言

(一)制産学大略の箇条 <細目略>

(二)道理上に適せざる箇条 <細目略>

(三)制産学の大本 <細目略>

五 計誌学 Statistics

緒言 計誌学の箇条 <州郡郷の類、人口、  
居業之別、開化之度、獄訟、医術、気学上之  
計誌、など>

第二 物理上学 Physical Science

緒言

一 格物学 Physics

緒言

(一)器械学 Mechanics 静学 Statics

動学 Dynamics 流体学 Hydraulics

気体学 Pneumatics

(二)音論 Acoustics

(三)熱論 Thermology

- (四)光論 Optics
  - (五)電論 Electricity
  - (六)磁学 Magnetism
  - (七)気象学 Meteorology
  - 二 天文学 (星学) Astronomy
    - (一)環年 Metonic Cycle
    - (二)行星
    - (三)太陽<sup>かん</sup>區 Solar System
    - (四)曆 Calender
    - (五)占象学 Astrogy
  - 三 化学 Chemistry
    - (一)無機性体上化学 Inorganic Chemistry
    - (二)機性体上化学 Organic Chemistry
    - (三)元素 Element
    - (四)親和力 Chemical Affinity
  - 四 造化史 Natural History
    - 緒言
    - (一)地質学 Geology
    - (二)鉱物学 Mineralogy
    - (三)化鉱学 Metallurgy
    - (四)植物学 Botany
    - (五)動物学 Zoology
    - (六)古界学 Palaeontology
- 以上<sup>(12)</sup>

(12)この「付載」の始めに書いたように、わたくしは細目についてかなり省略をした。詳しくは、全集第4巻の目次 (pp.11-22) によらねたい。しかし、ここに

示しただけでも、西周が多くの学を視野に入れて分類をおこなっていることが理解されうらうだろう。